

# 人文科学研究の方法論に基づいたシステムモデルの 検討 日本文学研究における資料間の関連につい ての分析を端緒として

著者	太田 あす香, 松村 敦, 宇陀 則彦
著者別名	Matsumura Atsushi, Uda Norihiko
内容記述	人文科学とコンピュータシンポジウム じんもんこ ん2009 2009年12月18日-19日 立命館大学
雑誌名	情報処理学会シンポジウム論文集
巻	2009
号	16
ページ	203-210
発行年	2009-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/114791">http://hdl.handle.net/2241/114791</a>

# 人文科学研究の方法論に基づいたシステムモデルの検討

## —日本文学研究における資料間の関連についての分析を端緒として—

太田 あす香†

松村 敦‡

宇陀 則彦‡

†筑波大学 図書館情報専門学群

‡筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科

近年、デジタルアーカイブの増加により、利用者は多くの資料を容易に見ることができるようになった。しかし、それらのアーカイブは個別に公開されているため、資料を見つけることは容易ではない。本稿ではその問題を解決するため、「人文科学研究の方法論に基づいたシステムモデル」を検討した。具体的には、そのシステムモデルを構築するために、日本文学の論文を分析し、資料間の関連を抽出した。その結果、最終的な目標であるシステムモデルの構築への可能性を示すことができた。

### A Consideration of System model based on the Methodology of Humanities: A clue for the analysis of relationship between the materials in the study of Japanese literature

Asuka Ota †

Atsushi Matsumura ‡

Norihiko Uda ‡

School of Library and Information Science, University of Tsukuba †

Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba ‡

Recently, a number of digital archives allow researchers to access humanities resources easily. However, it is difficult to search related objects because the digital archives are isolated. In this paper, we consider a system model based on methodology of humanities.

In order to construct the model, we extracted relationships between materials by analyzing papers of Japanese literature. As a result, we showed possibility of construction of the system model.

## 1. はじめに

近年、「デジタルアーカイブ」の増加によって、多くの一次資料を見ることができるようになり、人文科学研究への貢献が期待されるようになった[1]。しかしながら現在のデジタルアーカイブは個別に公開されているため、所蔵場所やタイトルが明確な既知の資料を見るためにしか使うことができない。

この状況に対し、人間文化研究機構が「研究資源共有化データベース」[2]を公開し、5つの研究機関のデータベースを一括横断検索できるようになった。しかし、その資料検索の方法はメタデータに対する情報検索技術を用いたキーワード検索であり、人文科学研究の方法論に即した資料の提示はできていない。したがって、人文科学研究者は、個別に公開されている多くの資料の中から、自分で必要な資料を探し出さねばならないのが現状である。これでは、研究者が自分の専門とする領域の資料を探す際には事足りても、専門外の領域の資料を探す際、

あるいは初学者が資料を探す際には、短い探索経路で的確に資料を見つける事はできない。

そこで本研究は、人文科学研究における資料の選択に際し、メタデータに対する検索という従来の方法に固執しないシステム、すなわち“人文科学研究動向を反映して資料の提示を行うシステム”の提案を最終的な目的とする。本稿ではその端緒として、日本文学研究における資料間の関連についての分析を手掛かりに、期待されるシステムモデルの検討を試みた。

## 2. 現状

### 2.1. 人文系データベースの相互運用からの指摘

「人文系資料の電子化を行う上での困難の一つは、仕様を明確に定義しづらいことだといえる」[3]という守岡の言葉にも示されているように、ある資料の内容を深く知るためのシステムには、その資料を用いて行う研究の手法が反映

されている。そのような人文系データベース[4]の相互運用については、永崎が、潜在的な可能性があると期待しながらも現状では実現が難しく、個別的なものとならざるをえないことを指摘している。そして、その理由の1つとして、人文系データベースが体現している「そのサービスの対象とする学問分野の方法論」の相互理解が、相互運用に必要であることを挙げている[5]。

研究に資する資料の提示には、資料に対する研究の方法論を踏まえる必要があるということ、また、複数の資料を提示する際には踏まえる方法論も変化させる必要があるということ、この人文系データベースの相互運用からの二つの指摘は、様々な資料を含むデジタルアーカイブでの資料の提示を検討する際にも重要な指摘である。

## 2.2. 実現されているシステムの問題点

現在公開されているシステムの一例として、人間文化研究機構の「研究資源共有化システム」[6]が挙げられる。このシステムでは、人間文化研究機構の5研究機関が提供する100を超えるデータベースを、検索項目を指定して一括横断検索することができる。しかしながら、その横断検索の方法は、各データベースのデータ項目を共通メタデータにマッピングして共有データを作成し[7]、情報検索技術を用いたキーワード検索を行うというものである。

また、国立情報学研究所と文化庁の「文化遺産オンライン」[8]では、全国各地の美術館・博物館が所蔵し、このシステムに登録している文化遺産を見ることができる。このシステムは、具体的な作品の名前を知らなくても、選択した作品を元にして、見たいような作品を見つけられるという機能を持つ。しかし、その方法はメタデータの中に出現する単語の頻度に基づく連想検索であり、やはり情報検索技術を用いた方法である。

つまり現在のデジタルアーカイブは、資料の利用のされ方や特性に関わらず、既存の情報検索技術を適用したものであるといえる。また、これに対し、人文科学研究者からの、自らの研究方法を積極的に示すことで使いやすいデジタルアーカイブを目指そう、というような活動もほとんど見られない。

このように、異なる研究領域にいる者が、それぞれの視点でもって凝り固まってしまっている思考を、本研究では「凝知化思考」と呼ぶ。人文科学研究の方法論に基づいたシステムであるためには、この凝知化思考からの脱却が必要である。そのためには、人文科学研究の方法論をシステム構築者に示すことができるように形式化し、人文科学研究の方法論と情報検索技術

を照らし合わせることで、その第一歩となるだろう。(図1)

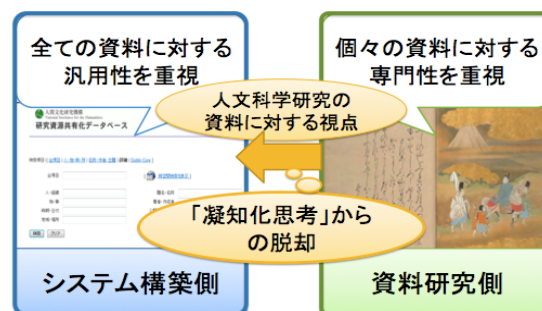


図1：凝知化思考からの脱却

本稿では、研究の方法論を形式化するために、論文の中に書かれている資料間の関連に着目した。

## 3. 検討するシステムモデル

論文とは、ある手法によってなされた研究の成果であり、その研究の観点に関連があるとして集められた研究対象の集合でもある。よって、その研究対象の間の関連が何らかの規則性を持つものとして形式化できれば、その結果を利用して、システム上に研究手法を介した資料間のつながりを再現できるはずである。

したがって、次のようなシステムモデルを想定した。(図2)

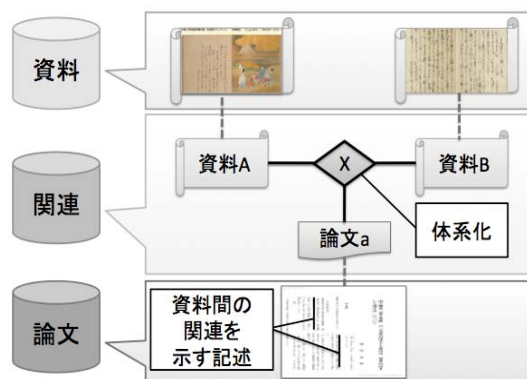


図2：想定するシステムモデル

このシステムモデルは、どの論文に、どのような観点から、何の資料と資料が関連づけられているのかというデータセットを蓄積する知識ベースを介在として、関連づいている資料のセットを提示するためのものである。

例えば、『平家物語』には当時の武士の何らかの意識が現れているのではないかと、として「研究資源共有化データベース」[9]に「平家物

語」「武士」「意識」という検索語を入力して検索してみたところ、「武士像への一視点－〈家〉の意識について」[10]という論文が一本検索された。しかし実際には、平成 20 年 11 月に「鎌倉期における関東武士の自己意識と『平家物語』」[11]という論文が発表されており、その論文では『平家物語』と『吾妻鏡』や『太平記』といった資料を共に用いた考察がなされている。現在のシステムでは、このように既に発表されている論文が指摘している資料についての情報を汲み取った検索ができていないことがわかる。

このような問題を解決するために、図 2 のシステムモデルを想定した。

## 4. 方法論の形式化

そのシステムモデルが実現可能なものであるかを検討する端緒として、資料間の関連の形式化が可能かどうかを検討した。人文科学には多くの学問分野があるが、本稿では、日本文学の論文でこの作業を行った。

### 4.1. 論文の分析の方法

具体的な手順としては、まず論文から資料の組合せを抜き出し、その組合せの根拠となっている記述をまとめ、「観点の詳細」の欄に記入する。次にそれを見て、観点として適当な名前を振り、「関連させている観点」の欄に記入する。ある程度数が貯まったら、観点として振った名前を見直し、同じ名前でカバーできそうなものは統一していく。このようにして、何らかの関連があると論文から読み取ることができた資料の組み合わせと、その関連の根拠となった観点、その詳細、そして、それが示されていた文章の頁と行という 5 項目からなる表を作成した。

なお今回は、分析を始めただけでもあり、その手順自体を模索しながら作業を進めていった。したがって、全ての分析は筆者が行っている。ただし、作業の手順、論文からの資料を抜き出す方法を確立させることができれば、この作業は協力者を募って進めていきたい。

### 4.2. 分析の結果

今回の分析では、東京大学国語国文学会編「国語と国文学」の平成二十年十二月号[12]、十一月号[13]に掲載された 13 本の論文から、357 組の関連を抜き出した。分析結果の一部を、表 1 と表 2 に示す。

表 1 は、実際に分析した 5 項目の表を、載せたものである。

例えば表 1 の 1 番では、志立による論文で『難太平記』と『太平記』には「室町幕府が、

自らと関係のある義家を源氏の起点と位置付ける意識が両者に示されている」という共通点が指摘されている。志立はこの『難太平記』の記述を、義家流との関係を持つ足利将軍家が、他の源氏諸族に対して特権的な地位を主張する意図をもって編纂された記事と主張している。そのため分析でも「編纂意図が共通している」ということから、「共通：編纂意図」という観点で『難太平記』と『太平記』が関連づいているとした。

続く 2 番では、『難太平記』と『吾妻鏡』について、「吾妻鏡は、草創期鎌倉政権が源氏の起点を頼義だと捉えていることを示す」記述があり、義家を源氏の起点と示すことを意図している『太平記』の記述とは異なると主張されている。したがって、1 番の『難太平記』の記述が室町幕府の地位を主張する意図をもって編纂されたという内容を受けて、この 2 番の関連は「相違：編纂意図」とした。

また、3 番では『吾妻鏡』と『平家物語』について「関東武士が、一門の起点を義家（後三年の役）に求める記述をとにもつ」という共通点が指摘されている。このことから志立は、『平家物語』の叙述は、関東武士がどのような意図をもって、一門の起点をどこに置いているかということが読み取れると考察している。したがって「共通：叙述意図」という観点で『吾妻鏡』と『平家物語』が関連づいているとした。

4 番では『平家物語』（延慶本）と『古今著聞集』について、「平家物語に義家の故事として理解すべきものが、前九年の合戦の故事として書かれているが、これが著聞集と同文」という共通点が指摘されている。志立は、ここでは『平家物語』と『古今著聞集』が同文ということを主張するに留まっている。したがって「共通：叙述」という観点で『平家物語』（延慶本）と『古今著聞集』が関連づいているとした。

5 番では、『平家物語』と『古今著聞集』について「平家物語の頼義、義家、前九年・後三年合戦の叙述が、古今著聞集の叙述に影響を受けている」という点が指摘されており、その叙述、つまりテキストが似通いながらも差異があるということが主張されている。そのことから、「影響：叙述」という観点で『平家物語』と『古今著聞集』が関連づいているとした。

表 2 は、5 項目の中から、関連のある資料の組として挙げられている「資料 A」「資料 B」と、それらを「関連させている観点」のみを抜き出した表である。

例えば、表 2 の田淵による論文[14]では、『阿仏の文』と『紫式部日記』の比較から『紫式部日記』について考察している。この過程で、『阿仏の文』と『紫式部日記』それぞれについての考察もなされた。そのため、『阿仏の文』と『紫式部日記』との関連だけでなく、それぞ

れが他のどのような作品に影響を受け、共通点を持ち、またそのことが研究されてきた成果がどのような図書にまとめられているかが論文に記述されている。したがって分析では『阿仏の文』について、内容が同じ『乳母の文』『庭の訓』という作品があることや、その本文が『群書類従』に所収されていること、また、『源氏物語』と共通する内容を持つことなどを抜き出すことができた。

これは、例えば「研究資源共有化データベース」で「阿仏の文」と検索しても、田淵が編集した『十六夜日記：白描淡彩絵入写本；阿仏の文』という図書[15]一冊しか出てこないことから、現在のメタデータ検索では実現され難い関連であることがわかる。

このように、日本文学の論文に記述されている“どの資料をどのような観点で見たか”という情報には、資料がどのような関連をもって使われているかが反映されていることが分かった。この分析を他の分野でも行うことで、それぞれの分野の研究の方法論を分析できると考えている。そして、複数の分野の結果を総合することで、システム上に適用できる人文科学研究の方法論を明らかにできる可能性があるのではないかと考えている。

## 5. おわりに

本稿では、人文科学研究における資料の選択に際し、メタデータに対する検索という従来の方法に固執しないシステム、すなわち“人文科学研究の研究動向を反映して資料の提示を行うシステム”が求められる背景を述べるとともに、その提案に至るための、人文科学研究の方法論の形式化について検討した。また実際に、日本文学分野の論文に記述された資料間の関連の分析を試みることで、今後の課題を明らかにした。

今後の課題としては、まず、論文から資料間の関連を抜き出し、分析する手法を確立させることが挙げられる。現段階では、実際に論文を読む作業者によって、抜き出す関連も分析の結果も異なる状態である。また、作業の手法の確立と並行して、日本文学以外の分野でも、同じように論文の分析と関連の抜き出しを行う必要がある。そして、作業の過程や結果を相互に比較検討し、より広い範囲で適用できる関連の形式化を進めていく必要がある。

人文科学分野は、学問分野ごとに異なる方法論を持ち、それぞれの研究対象を持つ幅広い分野であるが、一歩ずつ歩みを進め、最終的にはどの分野の資料も扱えるシステムモデルを目指したい。

## 参考文献

- [1] 国文学研究資料館複合領域研究系「文化情報資源の共有化システムに関する研究」プロジェクト編:平成18年度研究成果報告 共同研究「文化情報資源の共有化システムに関する研究」研究成果報告書, 2007.
- [2] <http://www.nihu.jp/kyoyuka/tougou/index.html>
- [3] 守岡知彦: データを生み出すデータのために, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol. 2008, No. 15, pp.13-18, 2008.
- [4] 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 次世代人文学開発センター・萌芽部門・データベース拠点ワークショップシリーズ(第I期). “人文学の研究手法と「人文系データベース」の設計思想”. 2008-08-13. <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/report.cgi?mode=2&id=163>, (参照 2009-11-15).
- \* 「人文系データベース」を、「人文学からの要求に潜在する可能性を顕在化させて人文学に提供し、それを受けてあらたに人文学から発信される課題を自身の発展に還元しうる「人文系データベース」」と説明している。
- [5] 永崎研宣: 「人文系データベース」における相互運用性をめぐる諸問題, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol. 2008, No. 15, pp.19-26, 2008.
- [6] 前掲[2]
- [7] 前掲[1]
- [8] <http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>
- [9] 前掲[2]
- [10] 高山利弘: 武士像への一視点—〈家〉の意識について, 群馬大学教養部紀要, Vol.26, No.2, pp.195-206, 1992.
- [11] 志立正知: 鎌倉期における関東武士の自己意識と『平家物語』, 国語と国文学, Vol.85, No.11, pp.67-77, 2008.
- [12] 東京大学国語国文学会編: 国語と国文学, Vol.85, No.12, 2008.
- [13] 東京大学国語国文学会編: 国語と国文学, Vol.85, No.11, 2008.
- [14] 田淵句美子: 『紫式部日記』消息部分再考—『阿仏の文』から—, 国語と国文学, Vol.85, No.12, pp.32-46, 2008.
- [15] [阿仏尼著]; 田淵句美子編: 十六夜日記: 白描淡彩絵入写本; 阿仏の文, 2009.
- [16] 前掲[11]
- [17] 前掲[14]
- [18] 高桑枝実子: ホトトギスと死者追慕の歌—万葉歌から中古哀傷歌へ—, 国語と国文学, Vol.85, No.12, pp.17-31, 2008.
- [19] 村上学: 延慶本瞥見—重衡物語を通じて—, 国語と国文学, Vol.85, No.11, pp.25-34, 2008.
- [20] 大津雄一: 戦時下の『平家物語』, 国語と国文学, Vol.85, No.11, pp.45-55, 2008.
- [21] 池田敬子: 平家物語と『太平記』のことば, 国語と国文学, Vol.85, No.11, pp.35-44, 2008.

表1 : 志立正知「鎌倉期における関東武士の自己意識と『平家物語』」 [16]

	資料 A	資料 B	関連させている観点	観点の詳細	参照部分
1	『難太平記』	『太平記』	共通: 編纂意図	室町幕府が、自らと関係のある義家を源氏の起点と位置づける意識が両者に示されている	p67 l1-3,20-21,
2	『難太平記』	『吾妻鏡』	相違: 編纂意図	吾妻鏡は、草創期鎌倉政権が源氏の起点を頼義だと捉えていることを示す	p68 l36-38,10-12
3	『吾妻鏡』	『平家物語』	共通: 叙述意図	関東武士が、一門の起点を義家(後三年の役)に求める叙述をとともにもつ	p70 l38-40
4	『平家物語』 延慶本	『古今 著聞集』	共通: 叙述	平家物語に義家の故事として理解すべきものが、前九年の合戦の故事として書かれているが、これが著聞集と同文。	p75 l1
5	『平家物語』	『古今 著聞集』	影響: 叙述	平家物語の頼義、義家、前九年・後三年合戦の叙述が、古今著聞集の叙述に影響を受けている	p76 l9-12

表2 :

◆田淵句美子

「『紫式部日記』消息部分再考—『阿仏の文』から—」 [17]

	資料 A	資料 B	関連させている 観点
1	『阿仏の文』	『乳母の文』	共通: 内容
2	『阿仏の文』	『庭の訓』	共通: 内容
3	『阿仏の文』	『群書類従』	その他: 所収
4	『阿仏の文』	『校注阿仏尼全集』	注釈書
5	『阿仏の文』	『源氏物語』	共通: 内容
6	『阿仏の文』	『源氏物語』	影響: 内容
7	『阿仏の文』	『とはずがたり』	影響: 内容
8	『阿仏の文』	『紫式部日記』	影響: 内容
9	『紫式部日記』	『栄花物語』初花巻	論及
10	『紫式部日記』	『新潮集成』	注釈書

11	『紫式部日記』	『たまきはる』	影響: 内容
12	『たまきはる』	『明月記』	物理的な関連
13	『紫式部日記 絵巻』	『紫式部日記』	相似: 内容

◆高桑枝実子

「ホトギスと死者追慕の歌—万葉歌から中古哀傷歌へ—」

[18]

	資料 A	資料 B	関連させてい る観点
14	『古今和歌集』	『拾遺和歌集』	影響: 内容 : 表現
15	『古今和歌集』	『千載和歌集』	影響: 内容 : 表現
16	『古今和歌集』	『金葉和歌集』	影響: 内容 : 表現
17	『古今和歌集』	『万葉集』	影響: 内容 : 表現

18	『万葉集』	『古今六帖』	影響:内容 :表現
19	『万葉集』	『古今和歌集』	影響:内容 :表現
20	『万葉集』	『後拾遺和歌集』	影響:内容 :表現
21	『万葉集』	『蜀魂伝説』	影響:内容 :表現
22	『万葉集』	契沖『万葉代匠記』 (初稿本)	注釈書
23	『万葉集』	鴻巣『全釈』	注釈書
24	『万葉集』	『新全集』	注釈書
25	『万葉集』	井出至『萬葉集全注』	注釈書
26	『万葉集』	武田『全註釋』	注釈書
27	『万葉集』	佐々木『評釈』	注釈書
28	『万葉集』	土屋『私注』	注釈書
29	『万葉集』	伊藤『釋注』	注釈書
30	『万葉集』	『新潮集成』	注釈書
31	『万葉集』	『新大系』	注釈書
32	『万葉集』	窪田『評釈』	注釈書
33	『万葉集』	井上『新考』	注釈書
34	『万葉集』	金子『評釈』	注釈書
35	『万葉集』	澤瀉『注釈』	注釈書
36	『万葉集』	中西『全訳注』	注釈書
37	『万葉集』	拾遺和歌集	注釈書
38	『万葉集』	契沖『万葉代匠記』	注釈書
39	『万葉集』	伊藤『釋注』	注釈書
40	『万葉集』	古今和歌集	影響:内容 :表現
41	『万葉集』	契沖『万葉代匠記』	注釈書
42	『万葉集』	『文選』	影響:用語

43	『万葉集』	『古今注』	影響:用語
----	-------	-------	-------

◆村上学「延慶本瞥見—重衡物語を通じて—」[19]

	資料1	資料2	関連の仕方
44	『平家物語』延慶本	『平家物語』長門本	共通:表現
45	『平家物語』延慶本	『平家物語』屋代本	相違:内容
46	『平家物語』延慶本	『平家物語』長門本	共通:内容
47	『平家物語』屋代本	『邦楽百科事典』	共通:用語
48	『平家物語』屋代本	由井恭子「平家物語「千手前」における芸能について」 (『梁塵』十六号、 1998年12月)	先行研究
49	『平家物語』屋代本	由井恭子「平家物語「千手前」における芸能について」 (『梁塵』十六号、 1998年12月)	先行研究
50	『極楽声歌』	『順次往生講式』 (永久二年<1114) 真源作)	共通:用語
51	『樂邦歌詠』	『順次往生講式』 (永久二年<1114) 真源作)	共通:用語
52	『平家物語』屋代本	『源平盛衰記』古活 字本	共通:用語
53	『平家物語』屋代本	『源平盛衰記』蓬萊 文庫本	共通:用語
54	『平家物語』屋代本	『教訓抄』 (狛近真、天福元 年<1233)巻三	共通:用語
55	『平家物語』屋代本	『日葡辞書』	共通:用語
56	『平家物語』屋代本	『新定源平盛衰記』 (水原一)	共通:用語
57	『平家物語』屋代本	『吾妻鏡』	共通:内容

58	鈴木則郎『平家物語』における平重衡像についての一考察	『平家物語』延慶本	先行研究
59	鈴木則郎『平家物語』における平重衡像についての一考察	『平家物語』長門本	先行研究
60	鈴木則郎『平家物語』における平重衡像についての一考察	『平家物語』屋代本	先行研究
61	鈴木則郎『平家物語』における平重衡像についての一考察	『平家物語』覚一本	先行研究
62	『平家物語』延慶本	『山塊記』(治承四年十二月二十八日条)	相違:内容
63	『平家物語』長門本	『山塊記』(治承四年十二月二十八日条)	相違:内容
64	『平家物語』延慶本	『平家物語』屋代本	相違:内容
65	『平家物語』長門本	『平家物語』百二十句本	相違:内容
66	『平家物語』延慶本	『平家物語』覚一本	相違:内容
67	『平家物語』長門本	『平家物語』覚一本	相違:内容

◆大津雄一「戦時下の『平家物語』」[20]

	資料 A	資料 B	関連させている観点
68	『もののふの文学』	『陸奥話記』	共通:表現
69	『もののふの文学』	『太平記』	共通:表現

70	『もののふの文学』	『平家物語』	共通:表現
71	『もののふの文学』	『平家物語全注釈』	共通:著者
72	『国民道徳概論』	『武士道叢書 上・中・下』	共通:著者
73	五十嵐力『新国文学史』	『平家物語の新研究』(春秋社)	共通:著者
74	五十嵐力『新国文学史』	『軍記物語研究』(早稲田大学出版部)	共通:著者
75	五十嵐力『新国文学史』	『軍記物語研究』(岩波講座日本文学第四卷三)	共通:著者
76	五十嵐力『新国文学史』	『戦記文学』(河出書房)	共通:著者
77	五十嵐力『新国文学史』	「古典学に現はれたる日本精神一大和民族の持つ三つの無限性一」(文部省教学局編纂『教学叢書』第一〇集)	共通:内容
78	『平家物語』	大津雄一「平家物語とロマン主義」(「軍記と語り物」二〇〇七年三月)	先行研究
79	『平家物語』	津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究二』(東京洛陽堂一九一七年<大正六>一月)	先行研究



80	『平家物語』	津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究二』 (東京洛陽堂 一九一七年(大正六)一月)	先行研究
81	『平家物語』	高木市之助「軍記物の本質」 (『国語と国文学』一九二六年一〇月)	先行研究
82	『平家物語』	沼澤龍雄「平家物語と時代精神」 (『国語と国文学』一九二六年一〇月)	先行研究
83	『国体の本義』	『臣民の道』	共通: 執筆意図
84	『平家物語』	石井庄司「国文学の再建」 (『文学』一九四六年二月)	先行研究
85	『日本文学講座』第一巻から第五巻	『保元物語』	先行研究
86	『日本文学講座』第一巻から第五巻	『太平記』	先行研究
87	『日本文学講座』第一巻から第五巻	『平家物語』	先行研究
88	高木武『日本精神と日本文学』 (富山房)	高木武『戦記物語と日本精神』(内閣印刷局、一九四〇年)	先行研究
89	高木武『日本精神と日本文学』 (富山房)	高木武『太平記と武士道』	先行研究

◆池田敦子「『平家物語と『太平記』のことば」 [21]

	資料 A	資料 B	関連させている観点
90	『太平記』	平家物語	影響:内容 :表現
91	『平家物語』	池田敦子「悪行の道程一清盛一」 (池田敦子『軍記と室町物語』、精文堂)	先行研究
92	『日本古典文学大系 太平記』	『日本古典文学大系 平家物語』	底本
93	『太平記』西源院本	『太平記』慶長古活字本	共通:内容 相違:表現
94	『太平記』西源院本	『太平記』慶長古活字本	共通:内容 相違:表現
95	『平家物語』	『太平記』慶長古活字本	相違:表現
96	『平家物語』	『太平記』慶長古活字本	相違:表現
97	『平家物語』	『太平記』慶長古活字本	相違:表現
98	『平家物語』	『太平記』慶長古活字本	相違:表現
99	『太平記』西源院本	『太平記』慶長古活字本	相違:表現